

平成25年度 矢掛町立矢掛中学校学校評価書

校長 渡邊 求

本校のミッション	
<p>今日より輝く明日のために</p> <ul style="list-style-type: none"> 目的をもって登校できる 確かな学力を身につける 	

学級数	11	学級	児童(生徒・園児)数	322	人
職員数	31	人	家庭数	290	戸
学校関係者評価委員	檜崎 裕志 (矢掛町人権擁護委員・元中学校長) 安藤 壽司 (町費校務支援員・元小学校長) 堀 賢一 (矢掛中学校PTA) 竹内 浩美 (地域支援コーディネーター) 岩崎 恭子 (家庭環境改善サポーター) 多賀 千智 (特別教育支援員) 諏訪 英広 (川崎医療福祉大学) 川上 公一 (県立矢掛高等学校長)				
専門評価委員	高木 亮 (就実大学) 安藤きよみ (川崎医療福祉大学)				

※生徒数は5月1日現在

A 成果をあげている B ほぼ成果をあげている C あまり成果をあげていない D 成果をあげていない

領域	中期目標	単年度目標	具体的計画	達成基準	自己評価	評価
1	確かな学力	・学力向上を目指した授業改善を図る。	<ul style="list-style-type: none"> 各教科の授業で、電子黒板等のICTを効果的に活用する。 ペアやグループ学習を取り入れ、基礎・基本の定着を図るとともに、レベルの高い課題に取り組みさせて活用力を高める。 各教科の授業で、自ら進んで考えを述べるができるよう支援する。 小中高の学校間の連携を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 電子黒板などICTを効果的に活用したり、グループによる学習などで生徒相互の学習活動を活性化したりすることで、学習意欲が高まるとともに、無作為に抽出した中低位層の生徒の学力が向上している。 50% (昨年39%) 以上の生徒が、授業中に自ら進んで考えを発表している。 小中高連携の活動を年6回以上設けている。 	<ul style="list-style-type: none"> 全国学力調査の結果より、コンピュータや電子黒板を使った授業がわかりやすいと感じている生徒の割合が全国・岡山県の割合をはるかに上回っており、ICTが効果的に活用されていると思われる。しかし、中低位層の生徒の学力の向上を示す有意な数値は得られていない。 活用についてのさらなる工夫が必要である。 アンケートの「授業でペアやグループで学習する場面がある」という項目に対して、91%の生徒、85%の保護者が「そう思う・どちらかという思う」と回答している。また「授業では、自分の意見や考えを伝える場面がある」という項目に対して、77%の生徒が「そう思う・どちらかという思う」と回答しており、ペアやグループ学習が生徒に意識できるようになってきている。しかし、中低位層の生徒の学力の向上を示す有意な数値は得られていない。今後、ペアやグループ学習の手法について質を高めていきたい。 「授業中は、自分の意見や考えを進んで発表している」という項目に対して、46%の生徒が「そう思う・どちらかという思う」と回答している。目標には達していないが、昨年の39%からは向上している。ペアやグループでの学習とともに、各教科での支援ができたことである。 中学校体験授業、矢掛高校授業体験、全職員が小学校の授業公開に参加するなど、小中高連携の活動を実施している。 	B
2	確かな学力	・家庭学習の充実を図る。	<ul style="list-style-type: none"> 個に応じた家庭学習の仕方を検討し、実践する。 保護者が家庭学習に関心を持ち、適切な声かけが行えるよう啓発する。 わくわくホリデースクールへの参加を促す。 	<ul style="list-style-type: none"> 78% (昨年の割合) 以上の生徒が、丁寧に課題に取り組んでいる。 学年で統一して家庭学習の充実のための取組を行っている。 100人以上の生徒がわくわくホリデースクールに参加している。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒に対するアンケートでは「宿題は家できちんと取り組んでいる」との回答が78%であった。保護者の回答もほぼ同じで、毎年、同様の数値である。 全国学力学習状況調査では、第3学年は2時間以上家庭学習をする生徒は29.4%で、全国平均の36.5%より低くなっている。また、30分未満は8.8%で、全国平均の8.8%と同じである。全くしない生徒は6.9%で、全国平均5.9%より高くなっている。また、学習塾に行っている生徒は第3学年で、45.1%と全国平均の61.4%より低くなっている。 岡山県学力・学習状況調査では、第1学年では30分未満が14.9%、全くしない生徒が3.8%で岡山県平均の9.7%、3.2%より高くなっている。 「学習のてびき」を配布したり、定期テストごとの学習計画を立てさせたりして、家庭学習の見直しを図っているが、十分な効果はあげられていない。課題一覧表を作成し配布することで、各教科の課題量を調べるとともに、家庭学習の習慣化を図って行きたい。提出物の点検や未提出者への放課後指導を行っている。わくわくホリデースクールの参加者は150名で、6日間で延べ749名と多数が参加し、年々多くなっている。 	B
3	支え合う生徒	・授業や学校行事を通じて良好な学級の雰囲気づくりに努め、生徒の自己肯定感を高める。	<ul style="list-style-type: none"> ペアやグループによる学習などにより、生徒相互の関係性の強化や所属感の向上を図る。 日々の観察による実態把握を強化し、活躍の様子を発信する。 考えを述べ合ったり、互いを認め合ったりする場面を設定し、支え合い高め合う集団づくりを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 4月のアンケート結果よりも学級生活に満足している生徒が増えている。 生徒の活躍の様子や思いが学校通信や学年通信等で公開されている。 特別活動、道徳等の時間で、生徒の自己肯定感を高める取組が継続的に行われている。 	<ul style="list-style-type: none"> QUアンケートを行い、クラスの潜在的な問題を見つける補助としている。今年度はQUアンケートの研修を行い、結果をより効果的に活用できるようにした。学級生活満足率は60% (5月) から67% (7月) に向上している。 学校通信 (縦線)、学年通信、進路だより、保健だより、生徒会新聞など様々な発行物で学校生活の様子を家庭に伝達している。内容も生徒の感想文などを取り上げ生徒の認められる場としている。 アンケートより「相談できる友達がいるか」という問いに対し、生徒、保護者とも90%以上が「いる、どちらかといういる」という回答であった。昨年とほぼ同等で生徒間同士の人間関係の形成はできていると思われる。また、「意見を伝える場があるか」という問いに対し、78%の生徒が「ある、どちらかといえはあ」と回答している。しかし、「自分の意見や考えをすすんで発表している」生徒は46%と全校生徒の約半数であった。生徒はそのような場があると認識しているものの、さらに自分の意見を言いたいという感情の表れではないかと思われる。 人権講演会、進路講話会など計画に基づいて継続的に行っている。 	B
4	支え合う生徒	・社会的実践力が身につくようにする。	<ul style="list-style-type: none"> 生徒会や専門委員会の活動と連携して、矢掛中学校三つの誇りが実践できるようにする。 生徒が主体的に地域の活動に参加するよう支援する。 	<ul style="list-style-type: none"> 90% (昨年度の割合) 以上の生徒が、矢掛中学校三つの誇りを意識して実践しようとしている。 50%以上の生徒が地域の活動に参加している。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒に対するアンケートでは「掃除ができる」91%「あいさつができる」91%「時間を守る」94%で、昨年と比べ、掃除、時間は肯定的回答が高く、あいさつはやや少ない回答であった。 夏休みボランティア体験に、192名 (59%) の生徒が自主的に参加し、活動することができた。 全国学習状況調査で第3学年では「地域の行事に参加している」の項目で、60%と回答している。 「ふるさと探求」(1年)、「チャレンジワーク14」(2年)、「東京班別自主研修」(3年)など総合的な学習の時間や学校行事をとおして、社会的実践力を身につける活動に積極的に取り組み、82%の生徒が充実感を感じている。保護者の回答は昨年度の80%を少し下回った。 	A
5	生徒の支援	・学校に適応しにくい生徒への支援を充実する。	<ul style="list-style-type: none"> 学校行事を工夫するなどして、魅力ある学校づくりに努める。 スクールカウンセラーや外部機関との連携を図り、個別のケース会議を行う。 日々の観察、教育相談の充実、小学校との連携強化を図り、学校に適応しづらい状況の早期発見・早期対応を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒が学校に行くことが楽しいと思っている。 不適応傾向のある生徒について、専門家と連携して支援方針を定め、状況に応じた他機関の援助を得ている。 小学校の授業参観及び情報共有を行うとともに、小学生を招いた行事を実施している。 	<ul style="list-style-type: none"> 大半(84%~87%)の生徒と保護者は「学校へ行くことが楽しい」と思っているが、そう思っていない生徒もあり、家庭・本人・学校との密な連携を図り、登校意欲を高めるように努めている。 学校カウンセラーとの連携や学期ごとの教育相談、機会を見つけての悩みを抱えている生徒との面談などで、生徒の状況に応じて適切な支援をしている。また、家庭改善環境サポーターや支援員との協力、ひまわりの家との連携なども再登校に効果をあげていると考えられる。個別のケース会議も適宜実施されている。 気になる生徒がいれば、家庭連絡をこまめにとり、保護者からの要望があれば、外部の機関も紹介している。 校内研修に小学校の教職員を招いたり、小中高連絡会では児童の様子を詳しく聞いたりして情報収集に努めた。 10月には小学生を招いて、中学校の授業を実施し、中学校への興味・関心を高め、スムーズに進学できるように配慮した。 	A
6	生徒の支援	・特別支援教育の充実を図る。	<ul style="list-style-type: none"> 教職員・支援員が密に情報交換をし、個別の支援を充実させる。 関係機関、専門家、保護者と連携し、個別支援を充実する。 特別支援教育に関する校内研修を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 特別な支援を要する生徒が安心して充実した学校生活を送っている。 学校、家庭、地域で支援方針を共有し、一貫した支援を行っている。 関係機関と連携し、事例毎により適切な支援方針を定め、支援している。 	<ul style="list-style-type: none"> 知的障害学級に5名、自閉・情緒障害学級に5名の生徒が在籍しており、各学級担任のほか特別支援コーディネーター、特別支援教育支援員3名を配し、それぞれに応じた支援を行っている。 自閉・情緒障害学級在籍の1名は、集団の中で活動することに抵抗感が強く、ほとんどの場面で個別の支援を行っている。 通常学級に在籍する生徒の中に発達障害または発達障害の疑いのある生徒が複数見られ、関係諸機関とのケース会議、専門家の助言等を得て指導を行っている。また、アセスメントシートの活用を図り、特別支援教育の視点から授業においても支援を行っている。 特別支援学級在籍の3年生4名については、自立支援とともに進路保障について保護者や関係機関と連携を取りながら、一貫した指導を行っている。 	B

分析・改善策

<ul style="list-style-type: none"> デジタル教科書や電子黒板などのICTを取り入れた授業を行うことで、学習への意欲や関心を高めることができている。 全国学力学習状況調査や岡山県学力学習状況調査では、平均値をわずかに下回っており、帰りの会で基礎学力の向上を図る取組をしたり、放課後に個別学習を行ったりして改善を図っている。家庭学習では、学習時間が少ない傾向にあり、学年通信や進路だより、課題一覧表などにより、生徒だけでなく保護者にも意識づけしていくようにしていきたい。 QUアンケートは学級の満足度を図る尺度として客観的な資料となり、学級経営の充実や個別の対応に有効である。また、今年度より学習のつまづきを事前に予測できるアセスメントシートを利用して生徒の実態を把握し、授業のめあてや流れを提示するなど、特別支援教育の視点を取り入れた授業づくりを行っている。 「わくわくホリデースクール」には、昨年に引き続き、多くの生徒が参加している。しかし、参加への意欲・意識に差があり、町教育委員会と協議しながら取組方法の改善を図りたい。 中1ギャップの克服のために中学校体験授業などに取り組み、また、適応指導教室「ひまわりの家」と連携を図りながら、不登校対策を行っている。 ペア学習やグループ活動の場面を多く取り入れた「学び合い学習」を行い、生徒相互の関係を深めることで、支え合い認め合う集団を育てていきたい。また、一部の生徒の中に規範意識が低く、ルールやマナーが守れない生徒がおり、指導に困難さを感じている。保護者や関係機関と連携し、あきらめない地道な指導を続けていきたい。 夏ボラの参加や「我武者羅②応援支援隊」の活動など地域への活動に積極的に参加し社会的実践力を身につけている。 特別支援学級に在籍する生徒の数も増加しており、通常学級に在籍する生徒の中にも個別に支援を必要としている生徒が複数見られる。これらの改善のためには、なお一層の人的支援の充実が必要となっている。

学校関係者評価

<ol style="list-style-type: none"> 確かな学力 <ul style="list-style-type: none"> 電子黒板などのICTを取り入れた授業や少人数指導など指導方法の改善が図られ、学習意欲や関心を高める工夫がなされている。また、ペアやグループ学習、帰りの会での基礎学力の向上を図る新しい取り組みも見られる。 全国学力調査等の分析を通して、各教科での課題を明確にして学力の向上を図ろうとする取り組みが見られる。 「矢掛町が目指している学力」の一つである「コミュニケーション力」の評価も必要ではないか。 家庭学習の習慣を身につけるためのさらなる取組が必要である。この時、家庭学習の時間だけでなく、取り組みの姿勢や質の評価も必要ではないか。 支え合う生徒 <ul style="list-style-type: none"> 学校行事や総合的な学習の中で生徒の活躍する姿が多く見られた。今後も生徒の自己肯定感を高める取り組みや学級生活での満足感が得られるようなきめ細かい支援や学級経営を継続して欲しい。 学級生活満足度調査の期間(5月→7月)が短い。主要学校行事が終了した11月頃の実施と比較が望ましいのではないか。 夏休みボランティア体験の参加率の向上は喜ばしい。ボランティアの質(姿勢や態度など)も高めて欲しい。 生徒の支援 <ul style="list-style-type: none"> 授業の中での地域の方々との交流が生徒に良い影響を与えている。 昨年度より特別支援教育支援員が多くなり、担任と連携し個々の生徒に応じた支援がなされている。 学校に登校できにくい生徒や規範意識が低くルールやマナーが守れない生徒がいる。学校と保護者だけでなく、関係機関等と連携した指導を継続していく必要がある。 総論(全体として) <ul style="list-style-type: none"> 学力向上や生徒指導について、校長が指導方針を明確にし、職員も共通理解を図り、協力した取り組みがより一層求められる。保護者には、生徒や学校を見る・見守る・関わる姿勢が必要である。 中一ギャップ解消や特別支援を必要とする生徒が増加傾向にある。小学校や特別支援学校との情報共有や連携協力を一層密にすることにより、不登校の解消や生徒の社会参加の支援につなげる必要がある。 設置者等への要望 <ul style="list-style-type: none"> 学校運営協議会からの要望書に示された内容について、生徒の学習・生活環境を維持・向上させる施設・設備面(エアコン、テニスコートなど)や人面(生徒指導支援教員の配置、特別支援員の継続と増員、スクールカウンセラーの勤務時間延長など)での手厚い支援をお願いしたい。
--

専門評価			
評価項目	観点	学校の現状(○優れている点 △改善が望まれる点)	改善の方向性
① 自己評価の状況	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題	○学力評価に加えQIアンケートやアセスメントシートの新規活用などが活発になされている。学校自己評価が基点となり教育諸状況の積極的な測定とこれを学校改善に活かす手法・努力・改善戦略が定着している。 ○生徒・保護者の意識調査的自己評価がどの程度の厳密な状況描写であるかは別の課題として、学校がアンケート等で生徒・保護者に尋ね、それを評価にまとめ公表する一連の「対話」の過程の定着は説明責任として意義深い。 △学校の自己評価は総合的評価(パリエーション)：査定・見積もり・品定めではなく改善のための評価(パフォーマンス)である。今年の学校の困難と諸課題の実情を踏まえれば、評価が「A」「B」に限られるのは不自然である印象を受ける。	本年度の状況は教職員大量異動と昨年度来の課題の顕在化により、学校の状況は「健康」とはいいがたい。が、これは「誰かの過失により生じた結果」ではなく、この困難に前向きに対応する「健全」な姿勢が公教育の使命である。「不健康を認識する健全さ」を評価できる姿勢を学校と設置者、町民に提案したい。
② コミュニケーション力の向上	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題	○アンケート等により生徒の当該意識や状況が縦断的に把握されている。人間関係の落ち着きや挨拶、地域活動などが積極的に見られ、意見表明の姿勢などに課題があることなどの確かな分析と課題意識の抽出がなされている。 ○授業における機器の活用定着により、時間を区切った発表やグループワークが積極的に行われている。このような教育方法は能動的学習(アクティブラーニング)として近年注目されており、意義深いものと思われる。 △能動的学習は特に小・中学校間の手法の体系的に留意する必要がある。	グループワークや少人数指導などの能動的学習は「学び・コミュニケーション」の方法を学ぶ学習である。矢掛町内の小・中学校間で継続的・体系的に発達に合わせた積み重ねる取り組みを行えば、義務教育修学期により効果的な能力開発を達成できよう。
③ 不登校児童生徒の解消	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題	△本年の不登校生徒数および個々の状況は残念ながら深刻である。しかしながら、この状況に健全に取り組んでおり、対処の適正さと現在若干の改善が確認されつつある状況である。今後の努力の持続と改善を希求したい。 ○概ね、これらの原因の多くが特別支援的課題とその関係で生じる生徒指導の困難などからなる。その原因の対応にも力が十分に注がれており、健全である。また、同様の原因を持ちながら異なる生徒指導諸問題を保健室や相談室など複数の受け皿により使い分けて対応しており、非常に有益である。	不登校と特別支援的課題は放置されれば将来の国民・町民の自立性を揺るがす問題である。義務教育修学までに一定の自立回復を目指す目標で保護者と町民に理解と支援を頂けるよう、設置者においては十分な説明と環境整備の努力を熱望する。
4, 学習不振児童生徒の解消	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題	○わくわくホリテースクール参加促進や学習手引き配布、電子機器活用など従前の努力を継続・発展させており基礎基本の定着、活用、学習意欲の3点の確保のための取組状況がしっかりと定着し、取り組みは健全といえる。 ○特別支援学級を含めた学級編成および教師の一人当たりの担当時間数、時間外の生徒対応の努力は「余裕がなくリソースが残る」といえるほど精一杯の取り組みのための努力が果たされ健全な取り組み状況といえる。 △上記取組状況の健全さ(前向きさや努力)にも関わらず学力中低位層生徒の学力確保は残念ながら困難な状況であり成果は不十分といえる。	従前の想定や計画による取り組みは十分に果たしている。この努力持続も学校の余裕のなさから持続困難が想定される。例えば評価の前提となる学力観を「特別支援の機能・役割を前提とした通常学級経営・教務体制」とするなど戦略的な練り直しが必要ではないかと提案したい。
5, 学校の組織運営	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題	△本事項は矢掛中の責任ではないものの、校長をはじめとした10名を超える本務教職員の人事異動が生じた本年度は「混乱を乗り越える試練となった年度」であるとしか評しえない。井原・笠岡地区、中核市倉敷市およびそれらを除く備中地区の間に挟まれた一教委・一中学校の自治体としてこのような人事異動の波が定期的には生じることは仕方がないことである。が、矢掛町においては町費負担で極めて大きな予算措置を学校は受けており保護者のみならず町民の期待も極めて大きいものであることを留意したい。	矢掛の転入者は期待が強い環境から「適応が大変」との意識が生じやすい。十分な協働ができるような意見や思いの集約が必要であろう。また、矢掛町としては分り易く具体的な「矢掛の教育」の在り方を表すことがこの対策に有益と思われる。
6, 学校と保護者・地域社会等との連携協力	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題	○設置者および町の多様な理解により制度・財政的にもボランティアにおいても極めて多様な協働者に恵まれている。本年度は試練の年であるがこの支援がなければ現況よりも困難な状況に陥ったものと思われる。 ○特に特別支援教育の協働と学校外の地域を通じた福祉の支援は大変な貢献であり、今後はこれを組織的に発展させることで大きな効果が期待できる。 △一方で矢掛の独特の手厚い支援体制が転入者からすると複雑で分りにくい部分があり、活用の枠組みを理解するまで時間がかかりやすい印象がある。	従前どおりの設置者および町民の支援をお願いしたい一方で、その手厚い支援の「交通整理」であるコーディネートの課題を感じる。矢掛町全体での分り易い目標設定と地域教育経営のコーディネートを要するため設置者のリーダーシップを強く求めたい。
⑦ 特別支援体制の整備	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題	○特別支援的な課題のある生徒はその行動面で様々な課題の現れ方(情緒・問題行動、教室に入れない・不登校など)が存在する。課題の現れ方ごとに教室内外において十分な人的資源の基で手厚い配慮がなされている。 ○特別支援加配や支援員は特別支援を要する生徒だけでなく、交流教室の生徒との関わりも形成しており、広く学校全体の支援の源となっている。 △地域的に各種障害の出現率が高く、障害の 카테고리 に基づいた理解は充分なされていないが、今後は個別のニーズの理解と対応が課題となろう。	障害が丁寧等の理解に加えて、今後は義務教育修学全体の期間で自立と社会参加を最大化できるような小中一貫の取組が課題となろう。そのために学力保障と社会性の視点でニーズを洗い出すような対応と指導計画の組織化が有益であると提案する。
8, 学校の総合的な状況		・昨年度は「潜在化」した範囲で収まっていた諸課題が今年度は「顕在化」した形となる。本務者教職員の大量人事異動と昨年度に潜在的に課題のあった学年が主な原因であり、結果として学力確保と生徒指導・学校生活面、特別支援的課題などで諸所の試練に見舞われた年といえる。学校の状況は「健康」とはいえないものの、学校側に大きな過失はなく取組や努力は「健全」であることを強調したい。 ・従前のような矢掛町費を主とした手厚い支援を今後も頂くことを前提としながらも、学校単位の取り組みでは学校の「健康」を取り戻すには難しい課題が多い。専門評価委員としては「学力の中低位層をいかに自立した矢掛町民に育てるか」をテーマにした小中共通の矢掛の義務教育目標(スロー・ド)を設定し、矢掛町全体を舞台(コミュニティ)とした学校間と地域福祉の連携で成果を管理する体制づくりを提案したい。	



来年度の重点・方針	
1 確かな学力	<ul style="list-style-type: none"> 「確かな学力」として、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題解決に必要な思考力、判断力、表現力等を育み、主体的に学習に取り組む態度を養う。 全ての教科で電子黒板や指導用デジタル教科書等のICTを効果的に活用する。ペーパーやグループによる学び合い学習を取り入れ、共に学ぶ楽しさや表現力を向上させる授業を構築していく。 家庭学習の一層の向上を図る。各学年に応じて家庭学習の仕方を示していき、宿題だけでなく自主学習ノートのつくり方などを指導していく。また、PTAの協力をもとに、保護者が関心をもって適切に援助できるよう啓発するとともに、「わくわく学習」事業を活用し、土曜日の学習のあり方について検討していく。
2 支え合う生徒	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の社会的自立を促し、豊かな人間関係づくり、学習指導の充実、生徒会活動の充実、家庭との連携など創意工夫を生かし、生徒・地域・職員にとって魅力ある学校づくりを推進する。 ペーパーやグループ学習による学び合いを通して、学級の中で共につながり居場所のある学級づくりに取り組む。 「地域に支えられ 地域を支える学校」として、生徒が主体的に地域の活動に参加するよう支援し、参加の状況を積極的に公開する。
3 生徒の支援	<ul style="list-style-type: none"> 特別支援コーディネーターを中心に教職員・支援員が密に情報交換をし、個別の支援を充実させる。通常学級に在籍する支援が必要な生徒を把握し適切な支援を行う。 生徒指導上の課題の克服を喫緊として捉え、町費職員の活用や関係機関との連携を密に取りながら、落ち着いた学校づくりに取り組む。 生徒が数多くの成功や失敗から学び、仲間と励まし合いながら成長できるような活動の場を設定する。 不登校の未然防止につながる小・中連携の効果的な取組を行い予防策を講じるとともに、スクールカウンセラーや外部機関との連携を一層密にする。 文部科学省調査における不登校発生率、暴力行為発生率、いじめ発生率を全国平均より大きく下回るよう数値目標を設定し、その達成に努める。
4 総論	<ul style="list-style-type: none"> 学力向上や生徒指導について、指導方針を明確にし共通理解を図り、教職員が一丸となって課題に取り組む。 コミュニティ・スクールとして、地域とともにある学校の在り方を研究し、地域と学校をつなぐマネジメント力の強化を図る。 心身ともに健康な教職員が魅力ある学校づくりの基盤であることを明確にし、教職員の多忙感の解消のために業務や行事を見直し、協働意識が持てるような協力体制を構築していく。

